

# 東日本大震災から2ヶ月 あのとき市民力で希望の灯が...

「今自分になにが出来たか?」  
いち早く無料で携帯電話の充電を行った江俣俊美さん

大地震のあの日、電気も水もない中で、携帯電話の存在はとても大きなものだったのではないのでしょうか。なにより家族の安否確認、友人知人、仕事場との連絡、地震や今必要とする情報の入手など。そんななか充電切れで困っている人がいるのではと、充電の無料提供をされたカメラ店の江俣さんに話を伺いました。

●通りすがりの人で印象的な方がいらしたとか?

電車が止まって塩谷中学校に待機されていた方が歩いて駅へいこうとしていて、ちょうど携帯の充電が切れたみたいでした。声をかけて充電してあげたのですが、仙台まで帰りたいとのこと。たまたまうちに来ていた、同業の千葉へ帰るカメラマンがいて、その方も千葉に親戚がいるので、いったんそこに行くということで、それじゃ一緒にということとで乗せて行ってもらうことになりました。タクシードといくらかかるかわかりませんがね。



●充電しようと思ったきっかけは?

車から充電できる人はいいけれど、高齢者は困っているのではと思いました。店に発電機、云々があったので十二日にすぐ実行しました。  
●どの位の人数が来ましたか?

店に張り紙をしたリ、消防車のマイクで流してもらったりして、十二日から十三日の午前中、電気がくるまで百人以上の人がみえました。一度に十台から十二台充電したのですが、高齢者はばかりでなく、高校生など若い人も多かったです。無料と呼びかけたにもかかわらず「おいくらですか?」と気づかう人や、ペットボトルやお菓子などを置いて行かれる人もいましたね。



津波で流された無数の車がヘッドライトに浮かぶ

仙台市の県職員の方でしたが、あとから二回メールをもらいました。千葉から支援助物資輸送の車に乗せて貰って仙台に三日後ぐらいに帰れたそうです。大津波が来た地区にいた奥さんとも、ガス爆発のあった塩釜にいた親とも無事出会うことができたこと感謝の言葉がつつられていました。  
その他にも、江俣さんは五区の消防の方と給水活動に参加したり、十八日には仙台、塩釜に救護物資を届けにいったそうです。  
自分のワゴン車で救護物資を届

## お互いさまの心で...

大地震での  
チョット良い話

◆商談で矢板に来ていたAさん。午後六時ごろ矢板駅に来ましたが、電車はストップ。市内のホテルは満員、手持ちのパソコンで探し、宇都宮市内のホテルの予約が取れたので、タクシード向かいました。  
◆しかし、そのホテルも停電で、真っ暗。予約の確認も出来ず、ロビーには人の気配はするもののよく見えないし、オートロックの鍵も使えないので泊めることが出来ないと言われました。  
◆矢板を出るとき、タクシー会社の社長が「泊まるところが無いならうちの宿直室使ってもいいよ」と言ってくれたのを思い出して、待たせていたタクシードでまた矢板に引き返しました。  
◆この移動中に運転手の佐藤勝さんは、Aさんが所持している食べものがコンビニで買った菓子類とビールだけということを知り、食べるものも、泊まる場所も無い人をそのままほっとくことが出来ない、自宅に泊めることに。  
◆そして翌日午後、再び宇都宮から東武電車を乗り継ぎ横浜へ。九時ごろ「無事に帰着しました」とタクシー会社に連絡が入りました。  
◆Aさんは出社後、同僚にその話をしましたが、「はじめは誰一人として信じませんでした。しかし、詳しく話すと『矢板の人ってそんな人が居るんだ』と驚いていました」と、後日再度商談に来た時、感謝の言葉とともにそんな話をしてくれました。  
◆佐藤さんは「本当に困っている人をみれば、自分だけでなくほかの人も同じことをしたと思う。」と話してくれました。  
◆こんな話他にもいろいろありました。まだまだ残っていた「お互いさまの心」素敵な矢板が見えてきます。  
(M)

(K)